



ファンタ
ジーの果
て

川崎ゆきお

現実とファンタジーとが重なり合う箇所がある。現実の奥へ行くと、これが結構ファンタジーとなり、ファンタジーの最深部へ行くと、非常に現実的となることもある。そういうことは想像で、確認した人などはいない。大陸の端に海があり、その海の果てに滝がある。大陸も海も亀の上に乗っている。そんな感じの想像に近い。

なぜ亀なのかは分からないが、水平線がやや丸いためかしのれない。だから、亀の甲羅に近い。

ファンタジーを空想物語で、現実とはかなり違うルールでできていたりする。つまり現実ではあり得ないことが、ファンタジー世界では普通にある。空を飛んだり、動物が喋ったりだ。それ以前に歴史上存在しないような王国があったりもする。だから、これは地上の国ではなく、想像上の国。空想物語の中での国だろう。

そこまでファンタジーの中程まで行かなくても、その入り口のような場所までなら行ける。日常的にも多少は接しており、出たり入ったりできる。

ファンタジーを夢の世界だとすれば、その夢に一步か二歩は足をかけているのだろう。

「また、悪い夢を見ていましたよ」

「悪夢ですか」

「眠っているときに見る夢など可愛いものだ。罪はない。ある夢を現実のものにしようと冒険してみた。最初から夢のような話だとは分かっていたのですがね。それより欲のほうが強かった。欲に目がくらんだのでしょうか」

「騙されましたか」

「最初の一步目は引き返せる。二歩三歩まではいい。次の四歩目が危なかったりする。もう戻れないほど入り込みすぎた」

「よくあることですよ。人から欲得を抜けば、何も残らなかつたりしますからねえ」

「欲得なら生きるためには必要なもので、問題はないんだが、あらぬ夢を見てしまったのがいけない。欲得ってのは現実にかなうからやるわけだしね。そうじゃなく、ファンタジーがだめだ」

「それは、虚構世界ということですか。おとぎ話のような」

「そうなんだ。こことは別の世界があるような気になってねえ。いつもなら二三歩で引き返すんだが、今回少し、ファンタジーをやりすぎた」

「ファンタジーって、やるものなのですか」

「食べていくためにやる行為じゃなくね、だから、しなくてもいいんだ。ファンタジーなんて」

「あ、はい」

「そのファンタジー、中程まで進んだのだが、その奥がチラリと見えた。するとね。それは現実以上に厳しい現実が見えたんだよ。それじゃもうファンタジーじゃない」

「よく分かりませんが」

「一步か二歩、見えたか見えなかった程度のファンタジーならいい」

「それは風俗店の入り口で、思うことと近いですか」

「え、何だいそれは」

「いえ、いいです」

「ああ、そうだねえ。入り口を少し覗く程度でいいんだらうねえ」

「それが、ファンタジーとの接し方のコツですか」

「そうだ。ファンタジーの正体見たり枯れ尾花だ」

「枯れススキを見たようなものですか」

「うまく喩えがかみ合わんようだが、それでもいい」

「しかし、人にはファンタジーが必要でしょ」

「それが、曲者でねえ。深入りはいけない。それだけだ」

「はい」

何を指してファンタジーと言っているのかは、ここでは分からない。

了